

今年も暑い夏を迎え、セミが元気に鳴いている。これをうるさいと感じる向きもあるようだが、私にとっては欠かせぬ夏の風物詩であり、変わらぬ自然のいとなみを実感できる大切な音である。

子どもの頃の夏の楽しみは、毎日のセミ取りであった。夏休みが近づくと、セミが鳴き始めるのを今か今かと待ち構える。鳴き声を聞くと捕虫網を持って外に飛び出し、声をたよりに探し出して網をかぶせる。逃げられることも多く、首尾よく捕まえたときの喜びは大きい。セミは飼うことはできないので、一通りの観察（種類、雌雄、形態、動き、鳴き声など）を行い、満足したら逃がすことにしていた。

当時住んでいた横浜の平地では、鳴き始めは夏休みが始まる7月20日頃で、毎年その時期は驚くほど一定していた。最初に鳴き出すのはニイニゼミで、7月末になるとアブラゼミが加わる。8月中旬を過ぎるとツクツクボウシの独特の鳴き声が混じり、夏休みの終わりを告げる。

今も住んでいるのは横浜であるが、セミの発生時期が昔に比べ明らかに早くなってきている。ここ数年のニイニゼミの鳴き始めは7月10日前後で、昔より10日早くなり、あわせてアブラゼミの出現も早くなっている。原因は言うまでもなく地球温暖化である。

温暖化はサクラの開花やセミの発生を早めただけでなく、多くの南方系の動植物の北上をももたらしている。その例は枚挙にいとまがないが、皮膚科関連でいえば、デング熱を媒介するヒトスジシマカは従来関東以北には分布していなかったが、今は青森県にまで棲息しているという。西南日本の病気だと思われていた日本紅斑熱が東日本で増えているのも、おそらく温暖化の影響でマダニとリケッチアの関係に何らかの変化が生じたためであろう。

クマゼミという大きな黒いセミがいる。西日本の読者にはおなじみのセミであるが、関東ではその鳴き声を聞くことはほとんどない。私自身の経験として、横浜でそれらしい鳴き声を聞いたことは何度かあるが、はっきりと虫体を確認できたことはなく、少なくとも定着はしていないようである。25年前に伊豆半島北部の長岡温泉に旅行したとき、旅館の庭にたくさんクマゼミがいて「伊豆の北部にこれだけいるのならもうすぐ横浜でもみるようになるな」と思ったのだが、予想に反してまだ来ていない。セミには立派な翅が生えているので、移動して分布を広げるのは簡単なはずなのに不思議である。気温以外のさまざまな要因が関係していると思われるが、このクマゼミの北上の遅延は私にとっては大きな謎である。

(相馬良直)

— 顧 問 —

大原 國章 大塚 藤男

— 編集委員 —

土田 哲也 五十嵐 敦之 相馬 良直 林 伸和 佐伯 秀久

「皮膚科の臨床」第65巻 第10号 9月号

2023 年 9 月 1 日発行（毎月 1 回 1 日発行）

定価 3,190 円（本体 2,900 円＋税 10%）

年間購読料金

定価 48,950 円（本体 44,500 円＋税 10%）

〔年間 13 冊（臨時増刊号、増大号を含む）の誌代〕

〔年間予約購読者に限り送料無料〕

発行所 金原出版株式会社

発行者 福村 直樹

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-31-14

TEL 03(3811) 7165〔編集室直通〕

TEL 03(3811) 7184〔営業部直通〕

FAX 03(3813) 0288

ホームページ www.kanehara-shuppan.co.jp

振替口座 00130-1-191269

印刷所 三報社印刷株式会社 TEL 03(3637)0005

広告申込先 (株)文京メディカル TEL 03(3817)8036

- ・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権（送信可能化権を含む）、貸与権、二次的著作物への利用に関する原著作者の権利は、金原出版株式会社が保有します。

・JCOPY＜出版者著作権管理機構 委託出版物＞

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（TEL：03-5244-5088、FAX：03-5244-5089、E-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。